

3月11日の大震災は人間の文明文化に対する自然の猛威をまざまざと見せつけました。特に福島原発事故は目を追うごとにじわじわと気仙地方にも放射能の影響が押し寄せて来る心配の種を宿してあります。

三陸沿岸の市町村は壊滅的な破壊、瓦礫、汚泥、そして地域産業と地域社会の崩壊という二重、三重の困難をこうむっております。

6月18日に津田塾大学で開催された国際保健学会東日本大会では「東北と言葉つなぎ〜震災を越えて〜」というランチタイムセッションが私の司会で1時間にわたって開催されました。

熱気あふれる集会でした。この学会は本来は3月19日開催の予定でしたが、3月11日の大震災のため6月18日に延期されておりました。

集会に参加したメンバーの中には石巻、東松島、仙台、南三陸町、気仙沼、陸前高田、大船渡、釜石、宮古など、多くの被災地で医療保健の領域でボランティアを行ってきた人々が多数おりました。

被災地の人々の忍耐力の強さと礼儀正しさには感心したとの意見が出されましたが、注目されることは、何故、東北地方の被災地にはこの様な忍耐力と礼儀正しさが、強く残っているのかということに話が及んだことです。

「東北と言葉つなぎ〜震災を越えて〜」

北里大学客員教授

梅内 拓生

た。被災地の人々の忍耐力の強さと礼儀正しさには感心したとの意見が出されましたが、注目されることは、何故、東北地方の被災地にはこの様な忍耐力と礼儀正しさが、強く残っているのかということに話が及んだことです。

5月13日の東海新報の投稿記事に「関市仙台郷

で、この場所より下に家を建ててはいけない、子孫末代の安寧のためにと刻まれています。この石標に刻まれた言葉をどのように世界の人々と分かち合うかを考えなければならぬ」という話になりました。

東京大学教授時代より客員教授として、20年以上も講義をしている北里

大学でこの名村氏の気仙の海洋産業の復興に関する投稿を伝え、大学の関係者にできるだけ早い時期に大船渡に北里大学が帰って来るように話をしました。

名村氏は昭和15年(1940年)創立以来、幾多、「海の男」を育てた旧広田水産高校の教訓に触れています。

「海をおそれず海をあなごらさず海にさからわず」海を熟知した言葉です。

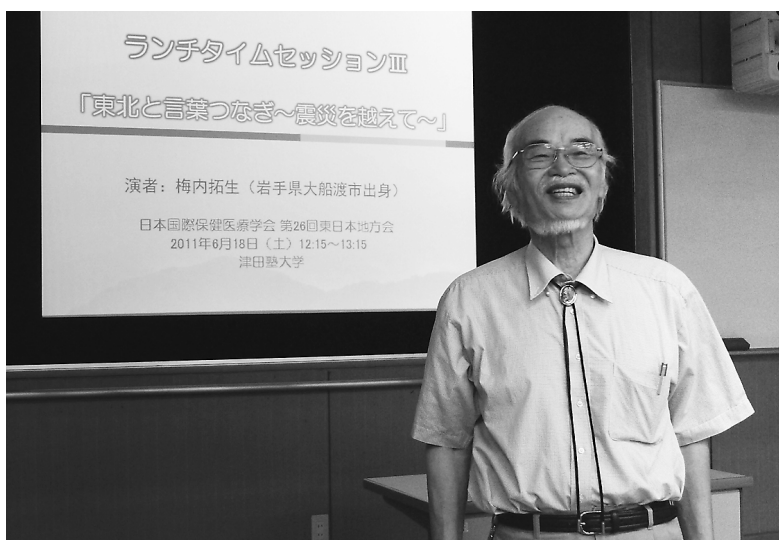
縄文時代からの歴史の話になり、東海新報6月7日のコラム「世迷言」に掲載された縄文貝塚、鹿踊り、鬼剣舞に話題が及ぶと、海外で保健医療活動経験のある人々が、自分たちが日本の歴史や文化を知らずに世界で保健医療協力活動を行ってきたが、先ず自国、日本の文化歴史を知って、その位置づけをしっかりとすることが大切であるという認識を示しました。

土研究会名村栄治氏の「海をおそれず、あなごらさず」国際港湾都市の幻想を捨て、水産都市への脱皮を」の記事が掲載されています。

三陸沿岸、気仙地方の水産業は縄文時代からの長い歴史と伝統を持っていることへの認識を新たにしたい、この水産業を基にした国際取引を考える事が大切というメッセージを読み取りました。

名村氏は「幸い、大船渡湾は湾口深く入り組んで波静かである。この大船渡湾全体を巨大な生け簀として、獲る漁業から育てる漁業への転換を図

さらには、三陸沿岸の丘や山の200を越す津波到達地点を示す石標があり、そこには津波が襲って来る可能性があるの



国際保健学会東日本大会で講演する梅内氏